

イタリア寄宿型成人教育の展開

—— 1950年から1965年までのウマニタリア協会を中心に ——

中嶋佐恵子

はじめに

本稿は、第2次大戦後、それ以前に北欧のような寄宿型成人教育の伝統がなかったイタリアで、ウマニタリア協会が1950年に始めた「成人教育のための合宿コース」をイタリア成人教育史に位置づけ、検討するものである。

ヨーロッパにおける寄宿型成人教育機関の歴史は、デンマークのフォルケホイスコーレ（民衆大学）まで遡ることができる。その影響を受け、ヨーロッパ各地に民衆大学が設立され、それらはヨーロッパ成人教育ビューロー（今日のヨーロッパ成人教育協会）に見るヨーロッパ成人教育の組織化の母胎となった。イタリアにおいては、20世紀初頭に寄宿型ではないが民衆大学が生まれ、イタリア成人教育の一端を担ってきた。

本稿が対象とする「合宿コース」は、民衆大学を加盟団体として擁するイタリア民衆文化連合（旧イタリア民衆教育連合）の本部を置き、その組織化の中心となっていたウマニタリア協会が、ユネスコ、イギリスの成人教育研究者、国内の教育学者などを協力者とし、多様な団体から支援を受け、イタリア北部において展開した取り組みである。

イタリア成人教育史研究においては、F. M. デ・サンクティスが、第2次大戦後に成人教育者が互いに学び合うために集い、伝統的な研究方法に対置される新しい研究方法を試みた例として、リナシタ寄宿学校、市民協力運動（Movimento di collaborazione civica）などの「初期の経験」に続き、ウマニタリア協会による「経験の成熟」を挙げ、イギリスとフランスの成人教育運動の代表的存在による影響に注目している。イギリスの人物には特にロス・D・ウォーラー、フランスの人物にはポール・ラングランを挙げている。その文脈においてウマニタリア協会については、特に合宿センターに言及している¹⁾。

また彼は、1950年代半ばから1960年代半ばの労働運動における教育活動に言及する中で、CGIL（イタリア労働総同盟）が1960年代初頭にウマニタリア協会の合宿センターなどで展開したコースの参加者数を挙げ、労働組合とウマニタ

リア協会の関係は、教育分野における教育方法的側面の追求という点で、疑いなく積極的であったと述べている²⁾。

第2次大戦後に始まった寄宿型成人教育の実践としては、先にあげたリナシタ寄宿学校、市民協力運動のほかに、公教育省が1952年度から始めた合宿コースもあるが、労働者の学習権保障をめざす担い手の形成という視点から、本稿はウマニタリア協会の「合宿コース」に注目する。

本稿の目的は、ウマニタリア協会が公表する資料が存在する1950年から1965年までの「合宿コース」を可能な限り把握し、コースが何によって成立し、何を育てたのかという視点からその特徴を明らかにすることにある。それを通してイタリア成人教育の展開過程に迫りたい。

1. 「成人教育のための合宿コース」(以下、合宿コースと略称する)

(1) 開催場所

合宿コースは、1952年に一時的に開館した合宿センターと1957年に開館した常設のセンターのほかに、ホテルやウマニタリア協会本部などで開かれた。

まず合宿センター以外の会場をあげておこう。最初の1950年のコース、1951年に開かれた12コースのうち10のコース、1952年の2つめのコースまでは、ミラノ北方のコモ湖畔ベッラーノのホテルで開かれている。1951年の残り2コースは、ミラノ東方のガルダ湖畔のシルミオーネ(ホテルかどうかは不明)で開かれている³⁾。1954年はミラノから北西のマッジョーレ湖畔のストレーザのホテル、1955年と1956年はミラノの北方ヴィッジュ(スイスとの国境から数キロ)のホテル、で開かれている⁴⁾。いずれもアルプスの麓の避暑地に適した地方である。

また1957年に常設の合宿センターが開館して以降も、少なくとも15コースはミラノのウマニタリア協会本部で、また少なくとも2コースはウマニタリア協会外部の会場で、すなわち合宿センター以外の会場で開催された⁵⁾。

次にウマニタリア協会の合宿センターの概要を述べる。コースの構想をより具体的に知る手がかりになると考えられるからである。

1952年の3つめのコースから会場となった合宿センターは、ミラノ大学から大学所有の建物を1年間無償で借り受けることが可能になり、実現したものである⁶⁾。場所はガルダ湖畔ガルニャーノである⁷⁾。センターの整備に際して、エディソン社、ピレリ社、イタリア信用金庫、イタリア商業銀行、ズニア・ヴィスコザから資金援助を受けた⁸⁾。センターの職員は、センター長、料理

人、守衛など9人である⁹⁾。

施設については、会議室と居間が建物の中央にあり、全員がそこを必ず通る位置にあった¹⁰⁾。喫茶コーナーがあり、くつろぎを与え親睦の場となることが意図される¹¹⁾。寢室は1部屋2～3人で1人部屋はない。寄宿コースの目的の一つは新しい人間関係をつくることにあるからである¹²⁾。また図書室もあった¹³⁾。

設備については、映写機、エピソードスコープのほかに、ラジオ、レコードプレイヤー、レコード・ライブラリーがあり、夜にダンスをしたり、音楽を聴くことができた¹⁴⁾。

参加者数の上限は24人とされた¹⁵⁾。また旅費、宿泊費、食費はウマニタリア協会がもち、企業は参加者に有給で休暇をとらせるため、コースの期間は1週間までにする必要があった¹⁶⁾。日程は8日間であっても初日は夕食からとなっている¹⁷⁾。

1957年に開館したウマニタリア協会の常設の合宿センターは、マッジョーレ湖畔メイナにあった¹⁸⁾。湖に面しており、人里から1キロほど離れていたという。ウマニタリア協会がファシストに支配される前に事務局長を務めていたアウグスト・オジモの名を冠して「アウグスト・オジモ」合宿センターと命名された。収容人数の上限は30人である。建物は3棟からなり、1棟は守衛の居室、1棟は宿泊と研究、もう1棟は台所と食堂である。図書室もある。職員はセンター長、財政係、料理人、給仕3人、守衛の7人で、全員がセンターで生活する¹⁹⁾。1月20日に開館し、2月1日にコースが開始した²⁰⁾。

(2) コース数と参加者数

最初のコースが開催された1950年から1965年までの合宿コースのコース数と参加者数を表1に示す。

実施されたコースのなかには、表1に含まれていないものもある。1961年から1964年の間に開催された手工芸職人養成のコース4つ、グラフィックアート学校の教員研修コース3つ、南部イタリア職業訓練センターの教育者コース11²¹⁾は、開催年が不明であるために表1には含めていない。さらに1961年から1965年の間に開催された合宿コースは、すべてを把握できていないため、ほかにもあると考えたほうがよい。

合宿センターではコースのほかに研究集会や組織の大会も開催された。そうした集会には、イタリア民衆文化連合第2回全国大会(1952年9月6日-10日)、中学校教員会議(1957年3月9日-10日)、大学生集会(1960年10月3日-7日)

表1：1965年までの合宿コースのコース数と参加者数

開催年	コース数	参加者数
1950	1	25人
1951	6	少なくとも126人
1952	12	把握できず
1953	0	0人
1954	12	把握できず
1955	8	把握できず
1956	6	137人
1957	29	682人（3つの集会の参加者数が含まれている可能性がある）
1958	28	576人（2つの集会の参加者数が含まれている可能性がある）
1959	26	640人（5つの集会の参加者数が含まれている可能性がある）
1960	19	569人（4つの集会の参加者数が含まれている可能性がある）
1961	少なくとも13 （教育者養成12+労働組合教育1）	少なくとも257人 （教育者養成236人+労働組合教育21人）
1962	少なくとも20 （教育者養成8+労働組合教育12）	少なくとも377人 （教育者養成158人+労働組合教育219人）
1963	少なくとも40 （教育者養成9+労働組合教育31）	少なくとも685人 （教育者養成158人+労働組合教育527人）
1964	少なくとも36 （教育者養成8+労働組合教育28）	少なくとも668人 （教育者養成131人+労働組合教育537人）
1965	少なくとも39 （教育者養成6+労働組合教育33） ²²⁾	少なくとも799人 （教育者養成141人+労働組合教育658人）

4冊の報告書（Società Umanitaria, *Relazione sull'attività sociale dal 1945 al 1951*, 1952. *Relazione dal 1952 al 1955*, 1956. *Relazione dal 1956 al 1960*, 1961. *Relazione dal 1961 al 1965*, 1966.）をもとに筆者が作成。1952年については Societa' Umanitaria, *Corsi residenziali per l'educazione degli adulti*, 1953. も使用した。「把握できず」とあるのは筆者が把握できていないという意味である。

などがある。

表1では、これらの集会への参加者数がコースの参加者数を示すべきところに含まれている可能性があり、その場合はそのように記している。

このように数値の把握が不十分ではあるものの、コース数、参加者数ともに全体としては増加傾向にあるとあってよからう。

(3) 内容と参加者の属性

コースの内容と参加者の属性は以下のようなものである。

1950年11月8日-15日に開かれた最初の合宿コースは、「娯楽を通じた成人教育」、「学校と民衆文化」、「市民教育」、「教育と労働」、「民衆教育の手段」をテーマにおこなわれた²³⁾。ミラノ北部鉄道、貯蓄銀行、アルファ・ロメオなどの企業の従業員や民衆大学職員、ソーシャルワーカー、大学生などが参加した²⁴⁾。

1951年に開かれた6コースは、ア)「生活への適応能力形成における学校の貢献」(1951年1月2日-7日)、イ)「成人教育」(3月17日-23日)、ウ)「移民問題」(1951年7月1日-14日、7月15日-28日)、エ)「教育と労働の諸問題」(1951年11月2日-10日)、オ)「社会生活への教育」(1951年12月6日-13日)の全体テーマのもと、それぞれにいくつかの小テーマで講義や話し合いがおこなわれた²⁵⁾。ア)には小学校教師、中学校教師などが参加した²⁶⁾。イ)には大学助手、ソーシャルワーカー、ENAL(全国労働者福祉機関 Ente Nazionale Assistenza Lavoratori の略称)の職員らが²⁷⁾、ウ)には小学校教師、市町村職員などが²⁸⁾、エ)にはソーシャルワーカー、UIL、CGIL加盟の工場労働者、企業から派遣された従業員が²⁹⁾、そしてオ)にはUNSAS(全国ソーシャルワーカー養成学校連合 Unione Nazionale per le Scuole di Assistenti Sociali の略称)³⁰⁾とENSISS(イタリア社会福祉学校全国機関 Ente Nazionale Scuole Italiane Servizio Sociale の略称)のソーシャルワーカー養成学校の学生が参加した³¹⁾。

1952年から1955年に開かれた33コースのテーマは、報告書によれば主に次の8つに分類できるという。

- ア) 教育と労働
- イ) 民衆的イニシアチブにおける成人教育
- ウ) 成人教育の視点からみた社会福祉
- エ) 成人教育と民衆図書館
- オ) 0-3歳児の精神衛生
- カ) 実践的職業教育の教育理論と教授法の問題
- キ) イタリアの移民問題
- ク) 企業内教育の方法³²⁾

ア)には多数の企業、行政機関などから229人が参加している。イ)には成人教育のアニメトーレなど85人が参加した。ウ)はソーシャルワーカー養成学校の学生や福祉団体の責任者156人が参加、エ)には図書館職員やソーシャルワーカーが参加、オ)は関連する分野に従事する専門職員など44人が、カ)には職業学校教師45人が、キ)には小学校教師など42人が参加した³³⁾。

ク)にあたる1954年1月18日-25日のコースはとくに管理職研修の基本的視点について論じた。「労働に関する諸関係」、「労働についての教育」、「労働の方法の改善」、「実際への応用」、「他の管理職研修プログラムの検討」をテーマにし、UIL、ウマニタリア協会、ミラノ・エディソングループ、リナシェンテ、ミラノ商業銀行などの団体・企業から人事部の責任者18人が参加した³⁴⁾。

1956年の6コースは、工場労働者と企業の事務職員のための2コース(5月1日-8日、6月25日-7月2日)、「成人教育における視聴覚教材」をテーマにしたコース(5月10日-17日)、社会センターのアニメトーレのためのコース(5月29日-6月5日)、サークルのアニメトーレのためのコース(6月7日-14日)、スポーツと成人教育についてのコース(6月16日-23日)からなり、参加者全体137人の内訳は、ソーシャルワーカーが61人、事務職員33人、工場労働者17人、小学校教師12人、大学生9人、その他5人となっていた³⁵⁾。

メイナの合宿センターが開館した1957年以降については、まず1960年までをみよう。この4年間に開かれた102コースの種類は以下のようである。

小学校、民衆学校、職業学校、高校、ウマニタリア協会の学校などの教師養成のコースが11コース、保養地のスポーツ指導員のための3コース、文化サークルや社会センターなどのアニメトーレや読書センター運営者のための20コース、ソーシャルワーカーのための3コース、移民カウンセラーのための2コース、民衆図書館についての6コース、成人教育をテーマとした1コース、といった広い意味での教育者を養成するコースのほかに、労働組合活動家のための5コース、協同組合指導者のための5コースと協同組合をテーマにした10コース、工場労働者、企業事務員、ショーウィンドー・デコレーターのための14コースなどのほか、大学生向け3コースなどもあった。また観光コース、美術コース、音楽コース、演劇コース、地域開発コース、市民教育コースなどもみられた³⁶⁾。

102コースのうち広い意味での教育者(教師、文化活動のアニメトーレ、ソーシャルワーカー、カウンセラー)に向けたコースが46となっており、重要な位置を占めていることは変わらない。しかし、以前と比べると、教育・福祉領域をテーマにしたものにたいし、労働組合活動家養成、協同組合の設立と運営、

工場労働者・事務職員の研修に向けたコースや、それ以外の多彩なコースが比重を増してきているのがわかる。

参加者については、この4年間のコース参加者の統計には14の集会の参加者数が含まれている可能性があるが、その内訳から指摘できることがある。4年間の参加者数の合計は2,467人で、そのうち最も多いのが事務職員553人(22.4%)で、以下多い順にソーシャルワーカーが382人(15.5%)、工場労働者373人(15.1%)、高校教師318人(12.9%)、大学生307人(12.4%)、小学校教師232人(9.4%)、協同組合からの参加者141人(5.7%)、労働組合からの参加者35人(1.4%)である³⁷⁾。労働組合からの参加者は非常に少ない。この数値はのちの時期との比較に役立つ。

つづく1961年から65年の5年間のコースについては、報告書によれば2つのタイプに分けられるという。成人教育・文化活動のアニメトーレなどを養成するコースと労働組合教育のコースである³⁸⁾。前者は表1において教育者養成とし、これには学校の教師、成人教育・文化活動のアニメトーレのほかに、ソーシャルワーカーの養成が含まれている。労働組合教育のコースはさらに大きく2つに分けることができ、労働者のための経済と労働組合の教育コースが66、労働者のための経済と福祉の教育コースが35ある。ほかに福祉や労働組合の問題に関連づけた移民教育のコース3、郊外の夜間教育活動のための教育者養成コース1がある。最後のものはタイトルからは教育者養成コースに分類されるように見えるが、報告書では労働組合教育に入っている³⁹⁾。

労働組合教育コースの参加者についてみると、5年間の参加者数の合計1,962人のうち、工場労働者は1,400人で71.4%、労働組合活動家(「工場労働者」とはだぶらない)は398人で20.3%、農業従事者65人で3.3%、事務職員37人で1.9%である。残りはその他と不明者である。工場労働者の中で最も多いのは金属産業労働者で358人、次が繊維・衣服で287人である⁴⁰⁾。

表1には、教育者養成コースと労働組合教育者コースの対比とその推移が分かるよう、それぞれのコース数と参加者数を記載した。これをみると労働組合教育コースの比重が増大していることがわかる。また1957年から1960年の4年間と比べて労働組合活動家の参加が非常に増えている。

(4) 学習方法

1952年のガルニャーノ合宿センターの活動報告書⁴¹⁾をもとに特徴的な点をあげる。

①ディスカッション

ディスカッションの技術が重視される。ディベートではなくディスカッションであることが大事で、ディスカッションの目的は正解を見つけることではなく、批判的精神を育てることにあるとされる。

ディスカッションのグループは6人以上15人以下とされ、グループ長をきめておこなう。グループ長は全員持ち回りとする。リーダーを育てることより、グループ長の難しさを体験させることで参加者の自覚を育てることを重視するからである。参加者が、議論を有機的で整然たるものにすべく協力することを学ぶ、これが意図するところである⁴²⁾。

②グループワーク

作業グループをつくり、学習活動を展開する。さらに研究グループ、手仕事グループ、奉仕グループもつくる⁴³⁾。作業グループと研究グループは4人以上8人以下とされる⁴⁴⁾。手作業グループはその活動例として人形劇が紹介されている。人形づくりから上演までをおこなう⁴⁵⁾。奉仕グループは掃除や配膳などを担当すると考えられる。参加者がとても若い時は、掃除、配膳などをグループで交替しておこなうこととされていた⁴⁶⁾。グループ分けには年齢、性別、文化的素養、文化的・社会的・政治的経験を考慮し⁴⁷⁾、男女混合とする⁴⁸⁾。

③調査

コースの3日めに調査をおこなう。翌日もあて2日間にもできる。宿泊地の地理、歴史、社会、経済、行政、教育について調べる。まず運営側から調査の概要が提示される。そこには26項目が示され、項目によりさらに小項目もある。人口、結婚の平均年齢、出生率と死亡率、移民、就業人口と失業者、福祉、住居、健康、文化、スポーツなど多岐にわたる。

各グループ内で掘り下げる課題を分担し、あらかじめ協力を依頼しアポイントメントをとっておいた地域の代表的人物に会いインタビューをする。第1グループは市長と市営診療所の医師、第2グループは新聞売りとお小教区主任司祭とセンターの守衛、第3グループは派遣小学校教員とCRAL（労働者レクリエーション・福祉サークル、Circolo Ricreativo Assistenza Lavoratori）の会長、第4グループは建築家、憲兵の准尉という具合である。そのあと午前中の残りの時間を使ってデータや情報を見つける。

午後は、インタビューをした4つのグループそれぞれから、同じ課題を担当した人を集めて新しく研究グループをつくり、その研究グループでレポートを準備し、全体会で発表する⁴⁹⁾。

④グループ長会議

グループ長会議は、コースの進捗状況、グループの機能、進行速度、問題点などを検討できる機会となる⁵⁰⁾。

⑤タイムスケジュール

タイムスケジュールのうち1つの典型的として示されているのは、7:30起床、8:30朝食、9:00授業開始、休憩をはさみながら、講義、会話、グループワーク、12:30昼食、15:30から全体討論、演習、19:30夕食、20:30グループ長会議、21:00親睦、23:00就寝、24:00閉館⁵¹⁾といった具合である。

(5) 協力者

コースには、講師として外部から多くの人々が協力しているほかに、参加者の斡旋や資金援助まで、多様な団体がかかわっている。ここではそれらの動向をとりあげる。

運営においては、在ミラノ・ブリティッシュ・カウンシルのリチャード・オーティー (Richard Auty) が1955年頃まで深くかかわっている。オーティーは最初の1950年のコースから運営メンバーに入っており、1951年の「移民問題」の2コースをのぞく4コースでも運営メンバーとなっている⁵²⁾。1950年のコースと1951年の「成人教育」をテーマにしたコースでは同じくブリティッシュ・カウンシルのレイ・スノーデンも運営メンバーに入っている⁵³⁾。

ブリティッシュ・カウンシルは1950年のコースにおいて、世界友愛会 (Fraternità Mondiale)、UNSAS、ENSISSとともに協力団体となっている⁵⁴⁾。1950年と1951年のコースの経費の大部分はブリティッシュ・カウンシルと世界友愛会からの寄付によってまかなわれ、ウマニタリア協会の出費は少なくてすんだという⁵⁵⁾。

1952年にはコース全体の運営責任者はメリーノ、共同運営者はオーティーとなっており⁵⁶⁾、1955年までは同じである⁵⁷⁾。オーティーは、1952年にはガルニャーノ合宿センターの6つのコースに効果的な役割を果たしたという。(うち1つは開催に至らなかった)⁵⁸⁾ 先にみたディスカッションやグループワークなどの方法に影響を与えたことがうかがえる。

またブリティッシュ・カウンシルは1952年3月18日-25日のコースと1954年の「成人教育と民衆図書館」コース(3月18日-25日)にも寄付をした⁵⁹⁾。後者のコースの講師陣のなかにはオーティーがいる⁶⁰⁾。ブリティッシュ・カウンシルは1952年の「民衆的イニシアチブにおける成人教育」コース(4月24日-

5月2日)にも協力した⁶¹⁾。そして1956年においても協力者のなかにオーティーの名がみられる⁶²⁾が、1950年代後半から1960年までに、オーティーは運営メンバーからはしりぞいている⁶³⁾。

イギリスからの協力者でもう1人、マンチェスター大学構外教育部のロス・D・ウォラー (Ross D. Waller) をあげよう。彼はほかでもイタリア成人教育とかかわりがあるが⁶⁴⁾、それだけではない。1956年に UICP の援助で WEA からイタリア訪問団が来た時、彼が団長であった⁶⁵⁾。WEA とイタリア成人教育との接点にいるといえよう。1951年の「成人教育」コースでは、彼もオーティー、スノーデンとともに運営メンバーに入っており⁶⁶⁾、講義も担当した⁶⁷⁾。またオーティーが共同運営者であった時に協力者として名を連ねている。

あとはこれ以外の協力者をみていこう。1950年、1951年の運営メンバーには、「市民協力運動」のエベ・フラミーニ、教育学者ランベルト・ボルギ、同じく教育学者フランチェスコ・バルトロメイスなどがいる⁶⁸⁾。1952年の協力者には、歴史学者・政治思想家ガエターノ・サルベミニ、哲学者ノルベルト・ボッピオ、フィレンツェ国立中央図書館長アニタ・モンドルフォなど、国外からはユネスコ専門官ラングラン、パリ人間博物館付属図書館長イヴォンヌ・オドンなどがいる⁶⁹⁾。ラングランはこの年の「民衆的イニシアチブにおける成人教育」コース (10月9日-16日) に参加している⁷⁰⁾。また、1952年には貯蓄銀行、アメリカン・フレンズ奉仕団などから、1954年には公教育省、アメリカン・フレンズ奉仕団、イタリア信用金庫などから、1955年には公教育省などから資金援助を受けた⁷¹⁾。

1957年から1960年における協力者をみよう。フィレンツェ大学ボルギ、ICCS (文化的・社会的なイニシアチブと協力) のエットーレ・ジェルピ、ユネスコのラングラン、フランスの「民衆と文化」のジョッフル・デュマズディエ、教育同盟 (Ligue de l'Enseignement) のアルベール・ジュングなどがいる。また専門家を派遣している団体には、派遣数の多い順にいくつか抜粋すると協同・相互扶助全国同盟47人、UIL 14人、イヴレア・オリヴェッティ社11人、国際教育同盟 (Ligue Internationale de l'Enseignement) 10人、イタリア社会党5人、CGIL 4人、ARCI 4人、イタリア労働省2人、全国労働銀行2人、UNLA 1人、OEEC 1人などがある。コースに参加者を派遣してきた団体を見ると、協同組合のコースには協同・相互扶助全国同盟が加盟者や職員を多数送ってきた。労働組合コースには、CGIL、UIL が多く、CISL がそれより少なく送ってきた。コースの組織に直接協力した団体は、消費協同組合全国協会、協同・相互扶助全国同盟、UIL、ARCI、UNSAS、フィレンツェ大学教育学部、イタリア

社会党、ユネスコ、OEEC、国際教育同盟などのほかに多数ある。また公教育省と労働省は成人教育コースと協同組合コースに資金援助をした⁷²⁾。

1961年から1965年の協力者のリストには、ボルギ、デ・サンクティス、ジェルピ、ガストーネ・タッシナーリ、アルド・ヴィザルベルギなどの教育学者の名がみられる⁷³⁾。また労働組合や文化団体などとは密な関係が維持されている⁷⁴⁾。

協力者全部はこれまであげたものより遥かに多く、知識人など個人のほか、国の行政機関、県、コムーネ、政党、労働組合、企業、教育・文化団体など各界にわたっている。

2. 協力者の系譜

(1) フィレンツェ学派

先に合宿コースの協力者としてあげた教育学者のうち、成人教育分野の専門家として当初から協力をしているボルギと、その弟子であり同僚でもあるタッシナーリ、雑誌『学校と都市』(“Scuola e Città”)の編集長を務めたヴィザルベルギ、トリノ大学(1956年から)のバルトロメイスは、フィレンツェ学派と呼ばれる教育学の系譜に連なる人々である。

フィレンツェ学派とは、フランコ・カンビによれば、エルネスト・コディニョーラ、ボルギとともに『学校と都市』の周辺で仕事をした教育学者・教育者のグループをいう⁷⁵⁾。

『学校と都市』は、1950年に当時フィレンツェ大学教育学部教授であったコディニョーラが中心になり創刊した雑誌で、コディニョーラがデューイから影響を受けフィレンツェに設立した「学校—都市 ペスタロッチ」という名の実験学校と結びついていた⁷⁶⁾。

ボルギは、1955年にコディニョーラの後任としてフィレンツェ大学教育学部の教授となり、1965年から1972年まで『学校と都市』の編集責任者となっている。

カンビは、フィレンツェ学派は様々な学問的潮流の中でもより中心的なものとして位置づき、戦後イタリア教育学の発展における交差点の一つと言えるという⁷⁷⁾。合宿コースには、当時のイタリア教育学における一定の理論的また実践的到達点からの関与があったということができよう。

(2) ロス・D・ウォーラー

1952年に出版されたウマニタリア協会の活動報告書には、合宿コースはイギ

リスの伝統的なもので、合理主義の理論とイデオロギーによって組み立てられており、ラテン人のメンタリティーには時に堪えがたいものであった、との記述がある⁷⁸⁾。最初のコースの運営から関わっていたブリティッシュ・カウンシルのオーティーらの影響が考えられるが、具体的なことは記されていない。

イギリスからの協力者にはロス・D・ウォーラーもいる。ここではウォーラーの経験と、本稿が対象とする時期のイギリス成人教育の変化を見よう。合宿コースのイタリア国外の背景をなすと考えられるからである。

ウォーラーは、1937年、マンチェスター大学構外教育部長となった。彼はこの構外教育部が寄宿制カレッジ (residential college) を持てるようにと考え⁷⁹⁾、翌年、マンチェスターから10マイル離れたバウドン (Bowdon) に寄宿制カレッジを設立する。マンチェスター大学は大学名を使って活動することは許可しなかったが⁸⁰⁾、一方で寄宿制カレッジと WEA の複数の支部との間には緊密で系統的な関係が育ったという。WEA のメンバーはカレッジの主な支援者であり、常連であった。カレッジの側からも WEA の活動に貢献した。1940年には寄宿制カレッジはその地区の WEA の一員となった⁸¹⁾。

寄宿制カレッジが戦後初期に開催したコースには、コミュニティー・センターの運営についてのコース (1947年)、学校福祉士のためのコース (1948年)、労働組合についての国際夏期学校 (1948年) がある⁸²⁾。

1949年、寄宿制カレッジは大学の構外教育部の一部となり、ウォーラーが教育責任者となる⁸³⁾。運営委員会には大学以外に WEA と LEA の代表も参加し、この体制のもとで開かれたコースには、ソーシャルワーカーのためのコース、具体的には学校福祉士、保護観察官、保育士などのためのコースがあった⁸⁴⁾。

ところで、J.F.C. ハリソンは、イギリスの成人教育の伝統的な担い手である WEA と大学拡張の1950年代の動向から、当時の市民・労働者の教育ニーズの変化を指摘している。WEA の活動が減退傾向を示す⁸⁵⁾ のに対し、リーズ大学は、WEA に魅力を感じない学生、すなわち初等教育レベル以上の教育的背景のある学生や職業的関心を持つ学生などを対象とした大学拡張を実践する中で、再び隆盛したという。こうして大学拡張は1950年代に急速に成長した⁸⁶⁾。

そこでは以前とは異なるコースが開かれていた。ソーシャルワーカー、保護観察官、刑務官、警察官、下級判事、全国福祉局職員、メンタルヘルスワーカー、ユースワーカー、病院経営者のためのコースといった福祉国家のサービスに携わることに関心を持つ人々のニーズに応えるようなコースや、鉱山労働者の組合活動家、協同組合組織の店舗の経営者と被雇用者、国営企業及び私的企業の

経営幹部や現場監督者のためのコースである⁸⁷⁾。

また長期コースから短期コースへの移行の傾向が見られたという⁸⁸⁾。つまり短期の職業的なコースへのニーズの高まりがあり、それに応えた大学拡張は発展したというのである。

ウマニタリア協会の合宿コースには、ソーシャルワーカーや企業経営者のための短期コースといった当時のイギリス成人教育の発展の流れに沿う共通点を見出すことができる。

おわりに

これまでにみたことから合宿コースの特徴をまとめると、まず第1は、教育・文化・福祉分野の担い手の養成が大きな部分を占めていることである。具体的には学校、成人教育・文化団体などの教育者の養成、ソーシャルワーカーの養成である。イギリスで1950年代に一般教養に代わり試みられた新しいコースの内容と重なるところがある。これに関連して、第2は、ソーシャルワーカーも教師や成人教育・文化活動のアニメーターとともに教育的支援者として位置づいていることである。法的には慈善団体として生まれ、福祉活動にとりくんできたウマニタリア協会の歴史、そして20世紀初頭の民衆教育にみられた教育と福祉の統合の視点⁸⁹⁾が生きているといえよう。

第3は、1950年代後半から労働組合教育コースがあらわれ増えていくことである。労働組合教育と分かるテーマを冠したコースがあらわれるのはメイナ合宿センターが開館した1957年で、その頃を転換点とみることができる。イギリスのWEAの減退傾向とは対照的である。1960年代に入ると、労働組合教育コースの比重と労働組合からの参加が増大していく。成人教育における労働組合教育の重要性が増したといえよう。

第4は、各界との協力関係があり、それらの専門家派遣や資金援助などにより支えられていたことである。ウマニタリア協会は創立以来、労働者組織とは密接なつながりがある。またそれ以外の各界の団体との協力関係がやはり創立以来形成されてきている。外国の団体や国際機関とも協力関係にある。とくにブリティッシュ・カウンシルは合宿コースの創設時から積極的に支援し、直接運営にかかわっていた。寄宿型という、労働者の一定期間の休暇と、宿泊費などの経費を要する合宿コースは、多様な分野の諸団体を結ぶ紐帯(アソチアツイオニズモ)により、内実がつくられたといっても過言ではないだろう。

第5は、国内外の成人教育専門家・教育学者の、またその他の分野の研究者

の専門性を活用すべく、理論ないし実践において経験豊富な協力者を数多く得たことである。

総じて言えば、ウマニタリア協会は、「恵まれない人々」の自立を援助するという創立以来の規約上の目的を超えて、専門性の高度化に応える教育活動と、のちに「150時間の学習権」を獲得する労働運動の担い手の形成の一端を担ったということができよう。そして多分野の諸団体・個人により支えられながら、それにより諸団体・個人とのつながりを構築していったといえよう。

注

- 1) Filippo Maria De Sanctis, *L'educazione degli adulti in Italia 1848-1987, Dal «diritto di adunarsi» alle «150 ore»*, Editori Riuniti, 1987, pp.255-256.
- 2) *ivi*, p.287.
- 3) Società Umanitaria, *Relazione sull'attività sociale dal 1945 al 1951*, 1952, pp.38-40. Società Umanitaria, *Relazione sull'attività sociale dal 1952 al 1955*, 1956, p.55. 以下、上の二書をそれぞれ *Relazione 1945-51*、*Relazione 1952-55* と記す。
- 4) *Relazione 1952-55*, p.54. Società Umanitaria, *Relazione sull'attività sociale dal 1956 al 1960*, 1961, p.75. 以下、後者の報告書を *Relazione 1956-60* と記す。
- 5) Società Umanitaria, *Relazione sull'attività sociale dal 1961 al 1965*, 1966, p.160. 以下、この報告書を *Relazione 1961-65* と記す。
- 6) Società Umanitaria, *Corsi residenziali per l'educazione degli adulti. Attività del Centro Residenziale di Gargnano-1952*, 1953, p.17.
- 7) *Relazione 1952-55*, p.55.
- 8) Società Umanitaria, *Corsi residenziali per l'educazione degli adulti*, p.19.
- 9) *ivi*, p.102.
- 10) *ivi*, p.54.
- 11) *ivi*, p.55.
- 12) *ivi*, p.65.
- 13) *ivi*, pp.55-56.
- 14) *ivi*, p.55.
- 15) *ivi*, p.63.
- 16) *ivi*, p.60.
- 17) *ivi*, p.85.
- 18) *Relazione 1956-60*, p.77 e p.79.
- 19) *ivi*, p.77.
- 20) *ivi*, p.79.
- 21) *Relazione 1961-65*, p.75.
- 22) 労働組合教育33のうち1つは教育者養成にもあたり、タイトルをみるかぎりには、そちらのほうが適切であると推定されるが、参加者数が労働組合教育の参加者数に含ま

れており抽出できないため、報告書にある33のままにしておく。

- 23) *Relazione 1945-51*, pp.38-39.
- 24) *ivi*, p.39.
- 25) *ivi*, pp.39-40 e p.44.
- 26) *ivi*, p.39.
- 27) *ibidem*.
- 28) *ivi*, p.44.
- 29) *ivi*, p.40.
- 30) UNSAS は質の高いソーシャルワーカーの養成をめざす組織である。1952年までに構成団体は11となっている。ウマニタリア協会はその一つで、ウマニタリア協会からの代表が副会長を務める。この連合は3つの学校を運営しており、そのうちの1つの学校の本部はミラノのウマニタリア協会にある。修業年限は2年で高卒者を対象としている。(*Relazione 1945-51*, pp.48-49.)
- 31) *Relazione 1945-51*, p.40.
- 32) *Relazione 1952-55*, pp.56-57.
- 33) *ivi*, pp.57-59. エ) については *Società Umanitaria, Corsi residenziali per l'educazione degli adulti* の p.23 を参照した。
- 34) *Relazione 1952-55*, p.57.
- 35) *Relazione 1956-60*, pp.75-76.
- 36) *ivi*, pp.79-82
- 37) *ivi*, p.85. 割合は筆者が算出した。
- 38) *Relazione 1961-65*, p.164.
- 39) *ivi*, pp.160-164.
- 40) *ivi*, pp.166-167.
- 41) *Società Umanitaria, Corsi residenziali per l'educazione degli adulti*, 1953.
- 42) *ivi*, pp.31-37.
- 43) *ivi*, p.45.
- 44) *ivi*, p.64.
- 45) *ivi*, p.94.
- 46) *ivi*, p.57.
- 47) *ivi*, p.40.
- 48) *ivi*, p.61.
- 49) *ivi*, pp.88-93.
- 50) *ivi*, p.67.
- 51) *ivi*, p.85.
- 52) *Relazione 1945-51*, pp.38-41.
- 53) *ivi*, p.38.
- 54) *ivi*, pp.38-40.
- 55) *ivi*, p.41.

- 56) Società Umanitaria, *Corsi residenziali per l'educazione degli adulti*, p.26.
- 57) *Relazione 1952-55*, p.60.
- 58) Società Umanitaria, *Corsi residenziali per l'educazione degli adulti*, p.25.
- 59) *Relazione 1952-55*, p.55.
- 60) *ivi*, p.85.
- 61) *ivi*, p.55.
- 62) *Relazione 1956-60*, p.76.
- 63) *ivi*, p.86.
- 64) 中嶋佐恵子「イタリア成人教育とサルデーニャ・プロジェクト」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第29号（2016年2月）参照。
- 65) *Relazione 1956-60*, p.114.
- 66) *Relazione 1945-51*, p.39.
- 67) *ivi*, p.40.
- 68) *ivi*, pp.38-40.
- 69) Società Umanitaria, *Corsi residenziali per l'educazione degli adulti*, pp.26-27.
- 70) *ivi*, p.25.
- 71) *Relazione 1952-55*, p.62.
- 72) *Relazione 1956-60*, pp.86-89.
- 73) *Relazione 1961-65*, p.140.
- 74) *ivi*, p.165.
- 75) Franco Cambi, *La scuola di Firenze. Da Codignola a Laporta 1950-1975*, Liguori Editore, 1982, p.11.
- 76) *ivi*, pp.14-15.
- 77) *ivi*, p.11.
- 78) *Relazione 1945-51*, p.38.
- 79) Ross D. Waller, *Residential College*, Manchester University, 1954, p.2.
- 80) *ibid.*, p.7.
- 81) *ibid.*, p.22.
- 82) *ibid.*, p.50.
- 83) *ibid.*, p.51.
- 84) *ibid.*, p.53.
- 85) J. F. C. Harrison, *Learning and Living 1790-1960*, Routledge and Kegan Paul, 2007 (First published in 1961), p.344 and p.349.
- 86) *ibid.*, pp.345-346.
- 87) *ibid.*, p.346.
- 88) *ibid.*, p.348.
- 89) 中嶋佐恵子「イタリア民衆教育の概念と内実」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第27号（2014年1月）参照。